敷島町文化財調査報告書　第16集
（山　梨　県）

松ノ尾遺跡 Ⅷ

鉄塔建設工事に伴う弥生時代遺跡の発掘調査報告書

2004
敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
東京電力株式会社

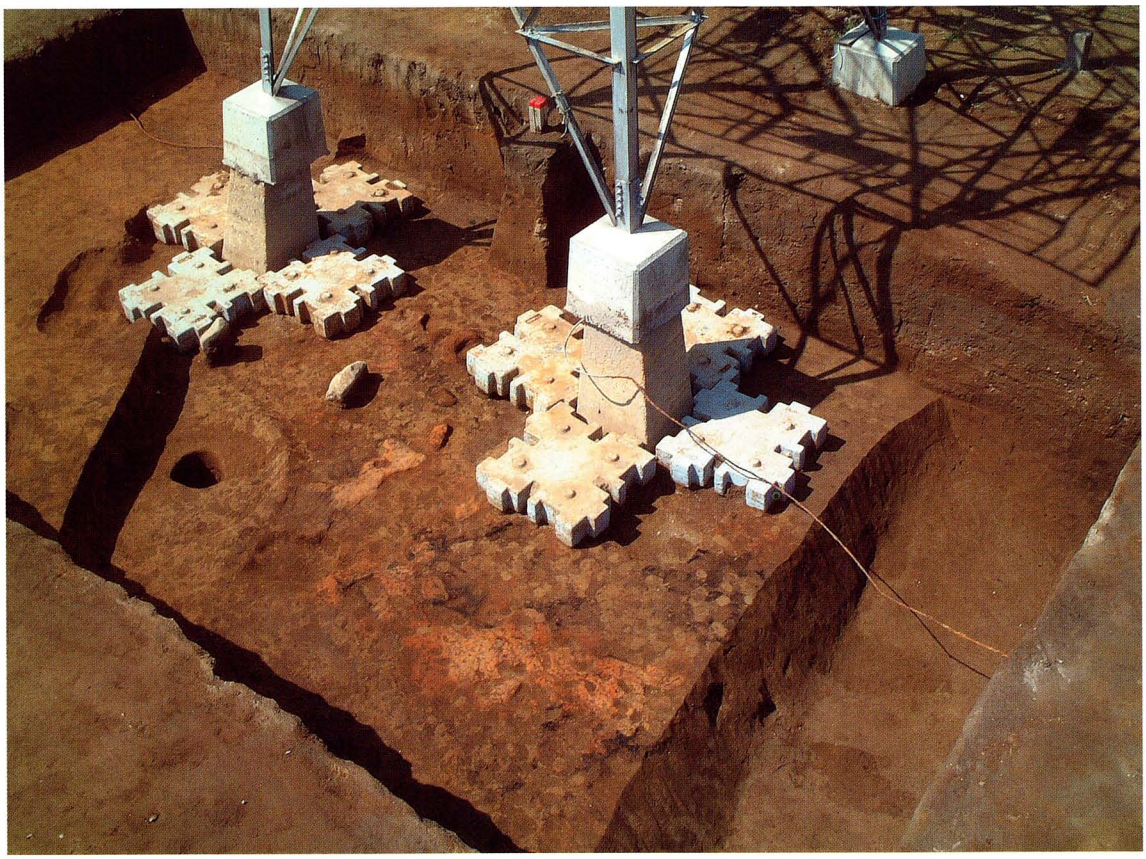
敷島町文化財調査報告書　第16集
（山　梨　県）

松ノ尾遺跡 Ⅷ

鉄塔建設工事に伴う弥生時代遺跡の発掘調査報告書

2004
敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
東京電力株式会社

巻頭カラー



松ノ尾遺跡　Ⅷ次　１号住居跡

序　　文

敷島町の南部は荒川により形成された扇状地形で、この地形上には古くから人々が生活をしていた痕跡となる数多くの貴重な遺跡が残されています。

近年では、町の南部において宅地造成などの開発が急増してきており、埋蔵文化財の記録保存のための緊急調査が頻繁に実施されています。

ここに報告する松ノ尾遺跡は、これまで道路建設、宅地分譲、大型店舗などの開発がおこなわれ、これらに伴う調査を年々重ねてきたところ、縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代、そして中世の各時代の遺構が発見されており、中でも今からおよそ1,300年前の古墳時代後期から約1,000年前の平安時代を中心とする大きな集落跡を形成していることが明らかとなってきています。

今回の第Ⅷ次調査では、鉄塔建設工事に伴う記録保存のための調査を実施することとなり、その結果、弥生時代の住居跡１軒と溝状遺構１条、その他溝状遺構１条、土坑６基、ピット３ヶ所が発見され、さらに貴重な成果を留めることとなりました。

これまでに、調査で得られました数多くの成果を後世に伝えるとともに調査研究、教育普及、生涯学習の資として多くの皆様に幅広く活用していただけるよう努めてまいります。

最後に、東京電力株式会社及び地権者の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力を頂きました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

敷島町教育委員会

教育長　山　口　正　智

例　　言

1．本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町中下条地区に所在する松ノ尾遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、鉄塔建設工事に伴って実施した発掘調査で、調査面積は約67㎡である。

発掘調査から報告書刊行までの経費は、東京電力株式会社が負担した。

3．発掘調査は、平成14年（2002年）８月29日～９月30日までの約１ヶ月間にわたって行った。

また、整理作業は平成14（2002年）年10月～平成16年（2004年）３月にかけて断続的に実施した。

4．調査組織は次のとおりである。

調査指導・主管	敷島町教育委員会
調査主体者	敷島町文化財調査会
調査事務局	敷島町文化財調査会
調査指導担当者	小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）

5．本書の執筆・編集および遺構の撮影は小坂、遺物の撮影は堤　吉彦が担当した。

6．発掘調査と報告書作成にあたり、次の方々よりご教示を賜った。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。

（順不同、敬称略）

中込司朗、坂本義夫、羽中田壮雄、飯野正仁、畑　大介（敷島町文化財審議会）

中山誠二（山梨県教育委員会）、保坂和博（山梨県埋蔵文化財センター）

7．発掘調査ならびに整理作業参加者（敬称略）

飯室久美恵、長田由美子、小林明美、高添美智子、堤　吉彦、保延　勇、望月典子、森沢篤美、関本芳子

8．本遺跡の出土遺物および調査で得たすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡　　例

1．本書の第１図は、国土地理院発行の地形図（１：25,000）「甲府市北部」「韮崎」「甲府市」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。

2．遺物挿図中、断面白抜きは土器、■は須恵器、□は陶器類、▒は磁器類である。

3．図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本　文　目　次

序　文
例　言・凡　例

第１章　遺跡をとりまく環境
１．遺跡の立地と環境 …… 1
２．周辺遺跡と歴史的背景 …… 1

第２章　遺構と遺物
１．住居跡 …… 6
２．溝状遺構 …… 8
３．土坑 …… 9

第３章　遺構外出土遺物 …… 10
まとめ …… 12

挿　図　目　次

第１図　松ノ尾遺跡と周辺の遺跡 …… 2
第２図　調査区位置図 …… 4
第３図　遺構配置図 …… 4
第４図　１号住居跡 …… 6
第５図　１号住居跡焼土分布図 …… 7
第６図　１号住居跡出土遺物 …… 7
第７図　１号溝状遺構 …… 8
第８図　１号溝状遺構出土遺物 …… 8
第９図　２号溝状遺構と出土遺物 …… 9
第10図　土坑と出土遺物 …… 9
第11図　遺構外出土遺物 …… 10

表　目　次

第１表　１号住居跡出土遺物観察表 …… 11
第２表　１号溝状遺構出土遺物観察表 …… 11
第３表　２号溝状遺構出土遺物観察表 …… 11
第４表　土坑一覧 …… 11
第５表　土坑出土遺物観察表 …… 11
第６表　遺構外出土遺物観察表 …… 11

図　版　目　次

図版１－１　調査区東側全景
図版１－２　調査区西側全景
図版２－１　１号住居跡
図版２－２　１号住居跡焼土出土状態
図版２－３　１号住居跡南側出入り口施設（南から）
図版２－４　１号住居跡南側出入り口施設（西から）
図版２－５　１号溝状遺構
図版２－６　２号溝状遺構
図版２－７　１号土坑
図版２－８　２号土坑
図版３－１　３号土坑
図版３－２　４号土坑
図版３－３　５号土坑
図版３－４　６号土坑
図版３－５　１号住居跡出土遺物
図版４－１　１号溝状遺構出土遺物
図版４－２　２号溝状遺構と土坑出土遺物
図版４－３　遺構外出土遺物（１）
図版４－４　遺構外出土遺物（２）
図版４－５　遺構外出土遺物（３）

第１章　遺跡をとりまく環境

１．遺跡の立地と環境（第１図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなだらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要害を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約17㎞、東西約４㎞と南北に細長い町である。本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におおよそ大別されるが、町域のほぼ８～９割は標高1,704ｍを測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

２．周辺遺跡と歴史的背景（第１図）

近年もっとも頻繁に発掘調査をおこなっている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は9遺跡が上げられる。

縄文時代　町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで11軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、金の尾遺跡⑧などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期に稀な埋甕炉を有する縄文時代前期末の住居跡が１軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで６回の調査がおこなわれてきたが、1987年の中央高速自動車道建設における第Ⅰ次調査で弥生時代の集落跡とともに縄文時代の住居跡計８軒（前期末１軒、中期７軒）が調査された。

松ノ尾遺跡の南部でも中期中葉にあたる住居跡１軒が確認されている（第Ⅲ次調査）が、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できるのは今のところ金の尾遺跡である。

弥生時代　金の尾遺跡があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。第Ⅰ次調査で弥生時代の住居跡32軒、方形・円形周溝墓17基をはじめ、集落跡を二分するとみられるV字の溝などが発見されており、県内で最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物をみると、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出土していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

近年の第Ⅳ次調査で、Ⅰ次調査で発見されたV字溝の延長を確認、発見された方形周溝墓には弥生時代後期のものをはじめとし、古墳時代前期、そして壺型埴輪を伴う古墳時代中期に該当する低墳丘墓も新たに確認された。1996年の第Ⅵ次調査では集落を外周する長さ約55ｍにおよぶ大溝（環濠跡）が出ている。

古墳時代　これまで６遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、三昧堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨などが上げられ、各遺跡ともS字状の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡（Ⅰ次）では調査区内の落ち込みから水晶の原石８点と水晶製丸玉の未製品１点が、末法遺跡

① 松ノ尾
② 原腰
③ 山宮地
④ 村続
⑤ 下動ノ木
⑥ 三昧堂
⑦ 御岳田
⑧ 金の尾
⑨ 末法

1 榎田
2 音羽
3 米草
4 万寿森古墳
5 加牟那塚古墳
6 おてんぐさん古墳
7 三光寺山古墳
8 湯村山１号古墳
9 湯村山２号古墳
10 湯村山３号古墳
11 湯村山４号古墳
12 湯村山５号古墳
13 湯村山６号古墳
14 大平１号古墳
15 大平２号古墳
16 塩沢寺裏無名墳
17 大塚古墳
18 無名塚古墳
19 薬師塚古墳
20 証文塚古墳
21 凧塚古墳
22 猪塚古墳
23 無名２号墳
24 子泣塚古墳
25 無名１号墳
26 天神塚古墳
27 天塚古墳
28 米草古墳
29 大塚古墳
30 大庭古墳
31 狐塚古墳（敷島町）
32 穴場古墳
33 双葉１号墳
34 往生塚古墳
35 双葉２号墳
36 狐塚古墳（双葉町）
37 竜王１号墳
38 竜王２号墳
39 竜王３号墳
40 二ツ塚１号墳
41 二ツ塚２号墳
42 へび塚
43 西山１号墳
44 西山２号墳
45 西山３号墳
46 狐塚１号墳
47 狐塚２号墳
48 狐塚３号墳
49 中秣塚
50 丸山古墳
51 四ツ石塚
52 形部塚１号墳
53 形部塚２号墳
54 両目塚１号墳
55 両目塚２号墳
56 両目塚３号墳
57 両目塚４号墳
58 両目塚５号墳
59 片瀬塚
60 双葉３号墳
61 天狗沢瓦窯
62 湯村山城
63 法泉寺山烽火台
64 和田城山
65 山之神遺跡（五輪塔１基）
66 土屋惣蔵昌恒館跡推定地
67 慈徳院五輪塔

第１図　松ノ尾遺跡と周辺の遺跡

（Ⅱ次）では１号住居跡から緑色凝灰岩質の石材で加工途中とみられる管玉１点と剥片類が出土し、周辺に該期の工房跡の存在が予測される。

金の尾遺跡（第Ⅳ・Ⅵ次調査）でも多くの遺物が出土しており、とくにⅣ次調査では本町で初めてとなる該期の周溝墓が２基確認されたことから、周辺でさらに新たな集落跡も今後発見される可能性が実に高い。

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でそれぞれ住居跡１軒がある。

末法遺跡（Ⅰ次）では１号住居跡から甕、壺、高坏、坏などが出土し、しかも器種と量が充実している。金の尾遺跡（Ⅳ次）1号住居跡や御岳田遺跡（Ⅰ次）２号住居跡からも甕、甑、坏、高坏などがみられる。

その他、遺構は確認されていないが松ノ尾遺跡の第Ⅱ次調査で該期の大型の有段高坏坏部２個体（口径約25㎝、深さ約5.0㎝）が出土していることから、周辺には該期の遺構・遺物が点在するようである。

なお、金の尾Ⅳ次調査の周溝墓群には二重口縁をもつ「壺形埴輪」を出土したものが１基存在する。

後期の甲府盆地北西部は、６世紀中頃から横穴式石室を有する大型の後期古墳が築造されるようになる。

荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳⑷や県内で２番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳⑸の存在などから、この頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6世紀末～7世紀前半には町の南部を群集墳（千塚・山宮古墳群－甲府市、赤坂台古墳群－双葉・竜王など）が取り巻くようになる（第１図●印）。

敷島町内にも戦後間もない頃にはまだ４・５基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳㉙と大庭古墳㉚が存在するのみとなっている。

また、松ノ尾遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれた土砂に相当すると考えられる包含層中から須恵器の𤭯、金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、臼玉、銅鏃、鉄鏃、鉄製刀子など古墳の副葬品とも思われるようなものが出土している。

当時の人々が暮らしていた集落跡は、本町内では現在のところ松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されており、他では金の尾遺跡の第Ⅱ次調査で住居跡１軒が遺跡の北東端で唯一確認されているだけである。

松ノ尾遺跡は各次調査でこの時期の住居跡が常に発見されているが、周辺遺跡と比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。第Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ次調査では住居跡が複雑に重複してみつかっており、とくに第Ⅱ次調査では一辺約７ｍ、第Ⅴ次調査で一辺約8.5ｍと約8.0×6.0ｍ、第Ⅶ次調査でも一辺約7.7ｍにもおよぶ大型の住居跡が発見されている。一方、荒川左岸の甲府市千塚に位置する榎田遺跡⑴でも古墳時代後期の住居跡が12軒発見され、規模が一辺約７ｍ四方を測る大型のものもみられる。集落内におけるこのような大型住居跡の存在について今後その位置付けを考慮していく必要性がある。

盆地北西部でのこうした勢力の繁栄を背景とし、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西に天狗沢瓦窯㊶が操業を開始するようになる。これは県内最古の瓦窯で、７世紀後半（白鳳期）とみられている。

この時期に併行する集落跡については、松ノ尾遺跡で近年徐々に住居跡が確認されてきており、また近隣では甲府市の榎田遺跡や音羽遺跡⑵で古墳時代後期～奈良時代に相当する住居跡が発見されている。

しかし、天狗沢瓦窯跡で焼かれ、その瓦が供給された寺院跡は残念ながらまだ発見されていないが、近年の調査で松ノ尾遺跡と村続遺跡④において瓦片が出土してきており、今後更なる調査が期待される。

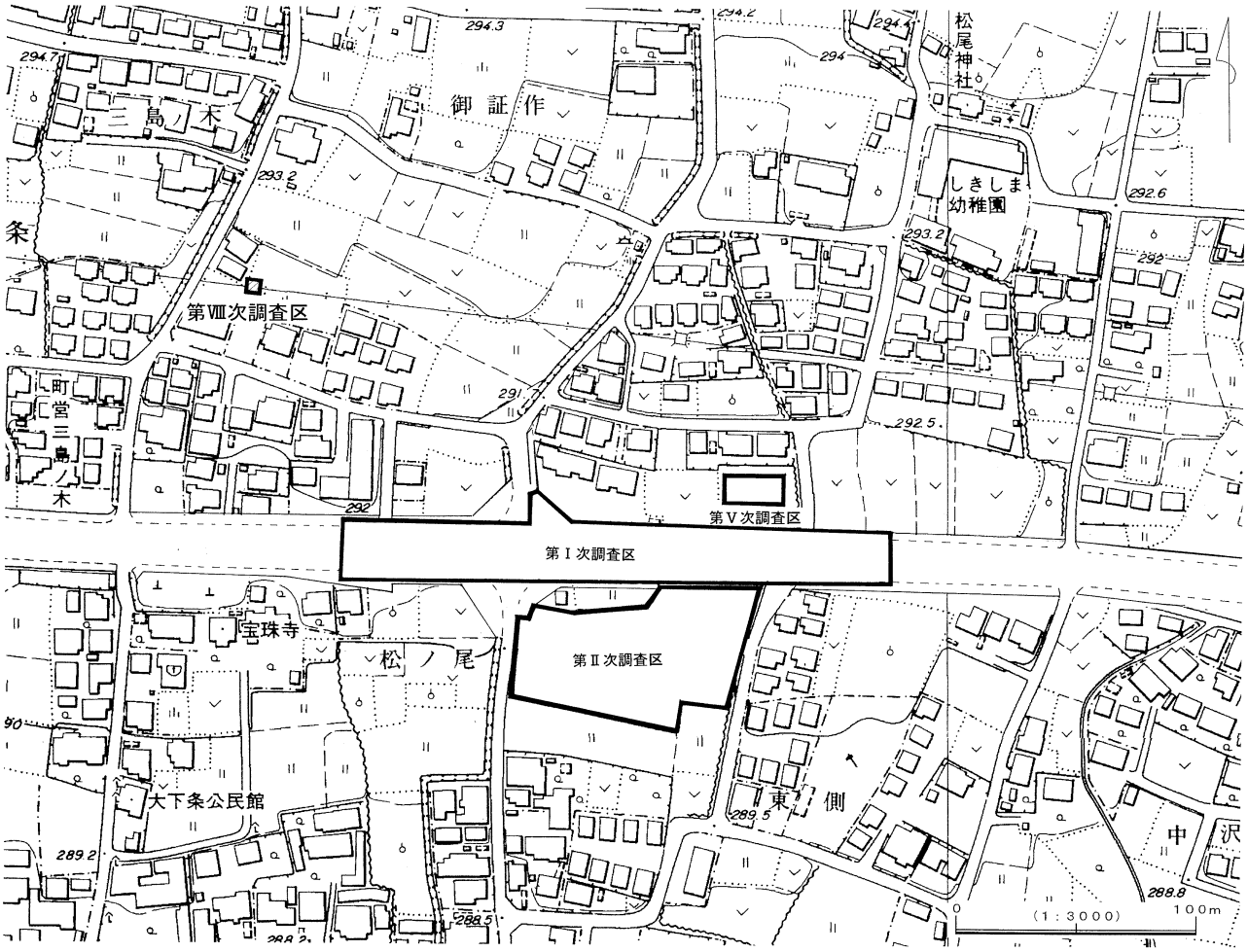
奈良・平安時代　該期の遺構は町内で現在もっとも数が多く、住居跡軒数だけでも総計100軒以上ある。

これまでの調査成果では、奈良時代から平安時代初め頃にかけては発見される遺構も未だ少ないが、平安時代中頃～末頃にかけては急激に遺構数も増加し該期の集落跡が主体を占めている傾向にある。

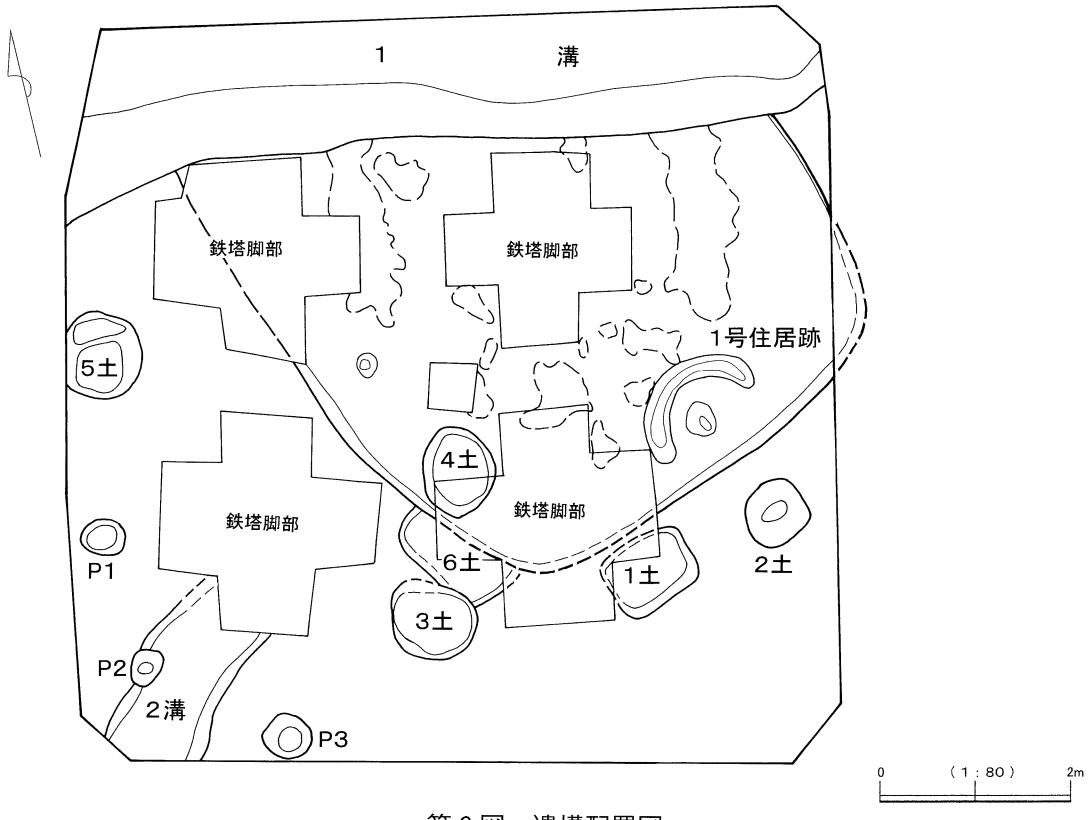
松ノ尾遺跡①は７回の調査でこれまでに住居跡37軒と竪穴状遺構10基が確認され、周辺の三昧堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でもその広がりと分布がみられる。

一方、町南部の北側では、原腰遺跡②、山宮地遺跡③などが上げられるほか村続遺跡④では調査面積は狭小であったが計36軒が確認され、詳細は今後の調査によるが大きな集落跡を形成している可能性がある。

この村続遺跡の南側には現在甲府から双葉へと横断する通称「山の手通り」が走っており、これは甲斐古道



第２図　調査区位置図



第３図　遺構配置図

9筋の内の1つにあたる道筋で旧「穂坂道」に相当する。本来茅ヶ岳の麓を経由して甲府の塩部から長野県佐久の川上までを結ぶ甲斐と信州を繋ぐ古道であった。

各遺跡出土の遺物をみると、膨大な量の土器をはじめとし須恵器、灰釉陶器、陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品なども出土している。中でも松ノ尾遺跡では墨書土器や円面硯（4個体分の破片）、そして銅製の帯金具や金銅製小仏像2躯が、また村続遺跡では銅製小仏像の台座が1躯出土していることなどが特筆される。

銅製小仏像はその出土状態や共伴遺物、文様・鋳造技術などからおおよそ11～12世紀の所産とみられ、しかも現在県内の発掘調査で出土した4例のうち3例が本町で発見されたものとなっている。

一方、平安時代末頃になってくると青磁や白磁などの貿易陶磁器が出土する遺跡がみられるようになる。

中世　該期の明確な遺構が確認されているのは、松ノ尾遺跡①と山宮地遺跡③の2遺跡である。

松ノ尾遺跡は、第Ⅶ次調査において一辺約5.2m、最深部約40cmを測り、竪穴内に人為的に石が敷き並べられた竪穴状石組遺構が1基発見され、周辺からは土師質土器や青磁片などが出土し、おそらく平安末～中世初頭の遺構とみられる。また、この石組遺構の周辺にはピット群が展開し、この内近接したピットから仏像の頭部にみられる螺髪1点が出土しており、今後これらの遺構・遺物から遺跡の性格を十分に検討していく必要性がある。

山宮地遺跡では、近年15・16世紀代とみられる遺構や遺物が調査成果として上がっている。

第Ⅰ次調査ではカワラケや古銭などが出土した竪穴状遺構1基や土坑などがあり、さらに第Ⅱ次調査において竪穴状遺構4基、土坑14基が発見されている。とくに後者の2号竪穴状遺構からは全国でも初例とみられる17点の仏具を含んだ銅製品類が出土した。

山宮地遺跡の東脇には前述の穂坂道と南北に直行して南北朝時代に「御嶽道」が発達するが、この古道は修験道の霊場であった金峰山信仰の登山口であったようである。この「御嶽道」と遺跡との位置関係、そして銅製品の内容から「御岳信仰」とのかかわりも推測される。

さらに、第Ⅲ次調査ではカワラケと古銭が埋納された計32基にのぼる土壙墓群が検出され、本遺跡は極めて部分的な調査であるにもかかわらず中世遺構が広範囲に埋蔵されていることが明らかとなってきている。

本遺跡の東隣には御嶽道を挟んで調査の手がこれまで一切入ったことのない大庭遺跡があり「甲斐国志」古蹟部には字大庭に武田家の家臣であった「土屋惣蔵昌恒」屋敷跡㊻が存在したという記述がみられ、山宮地、大庭遺跡周辺のこの一帯は本町における該期の様相を考えていく上でも今後重要な地域であるといえよう。

このように、近年の発掘調査ではこれまで判然としなかった中世の様相も徐々に明らかになりつつある。

明確な遺構はまだ判然としないが、これまで調査を行ってきた各遺跡では量的には僅少であるがカワラケや常滑、瀬戸・美濃などの陶器類、そして白磁、青磁などの貿易陶磁器などの出土が目立ってきており、今後盆地北西部地域における中世の様相を把握していくうえで注目される。

今回報告する松ノ尾遺跡は、荒川によって形成された扇状地上にあり、なかでも南北に延びる微高地上を中心に占地した遺跡である。そして、調査の対象となった第Ⅷ次調査地点は松ノ尾遺跡内で最も西端にあたり、調査地点の周辺は標高約292mを測る。

以下、平成14年度におこなわれた松ノ尾遺跡第Ⅷ次調査の成果についてみていくこととしたい。

第２章　遺構と遺物

１．１号住居跡（第４～６図、第１表、図版１、２－１～４、３－５）

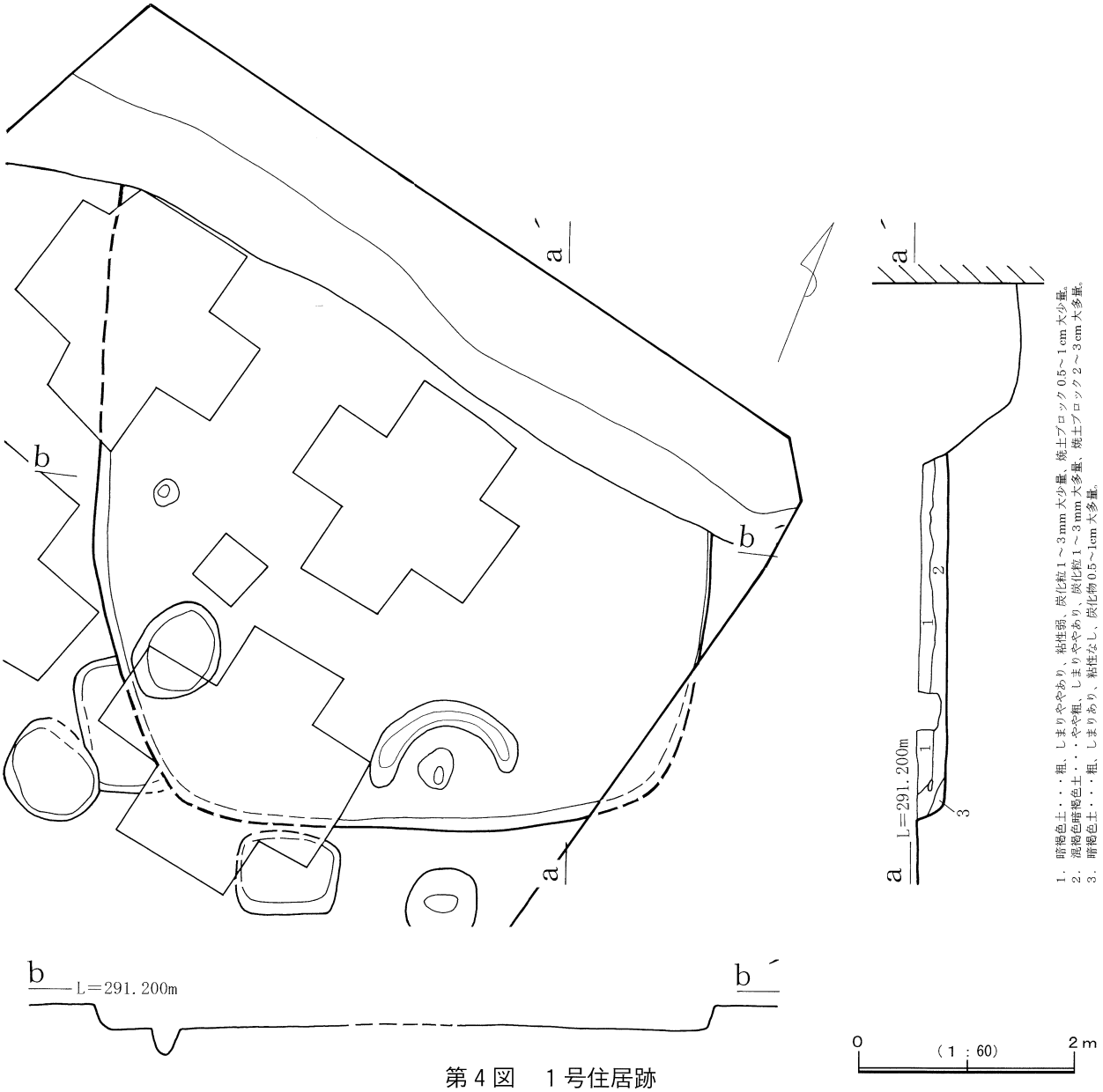
調査区中央から北東寄りに位置し、１号溝状遺構によって北側を大きく切られている。住居跡の西側半部は既存の鉄塔脚部埋設時に３箇所にわたり掘削されてしまっていた。

このように、本住居跡は他の遺構との重複や鉄塔建設でほとんど削平されてしまっていたが、幸いにも鉄塔の真下から良好な西壁が遺存していることが確認され、さらに東と南壁もその周囲が削平を受けながらも残存していたことから、東西約5.7ｍを測ることが明らかとなった。

床面はとくに突き固められたような硬化した面は認められなかったが、住居跡の中央にやや偏在するように焼土跡が帯状に展開し検出された（第５図）。

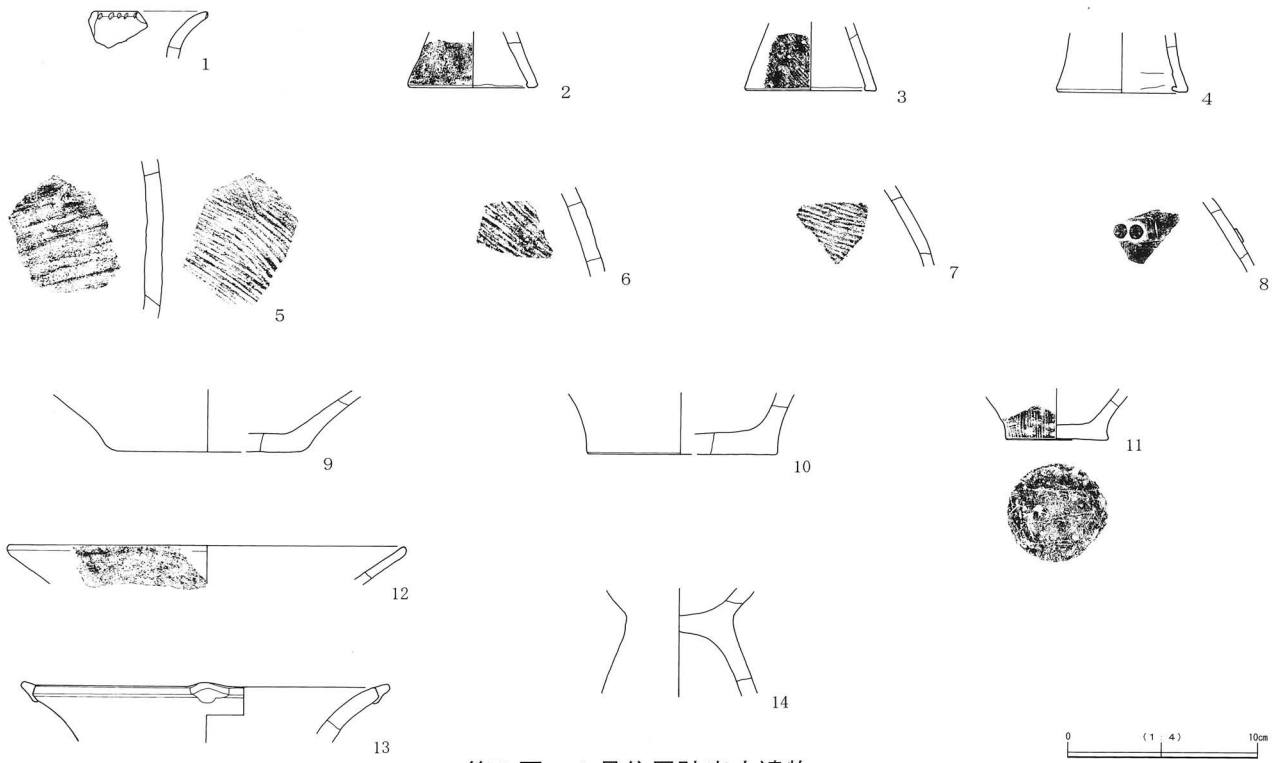
この焼土跡の分布状況と東、西、南側で確認された住居跡の壁との位置関係から、本来およそ南北約6.0ｍ、東西約5.7ｍの規模を有する隅丸長方形状の住居跡であったと考えられる。

なお、各壁はしっかりとした掘り込みとなっており、深さ約22㎝を測る。



第４図　１号住居跡

第5図　1号住居跡焼土分布図



第6図　1号住居跡出土遺物

住居跡の南壁寄りのほぼ中央にあたる場所には、この南壁に対し逆U字状に幅約25～30㎝のわずかな高まりをもつ土手が巡らされており、この内部中央からはピット（直径約30㎝、深さ約30㎝）が１ヶ所確認された。おそらく、出入口などの施設であった可能性が考えられる。

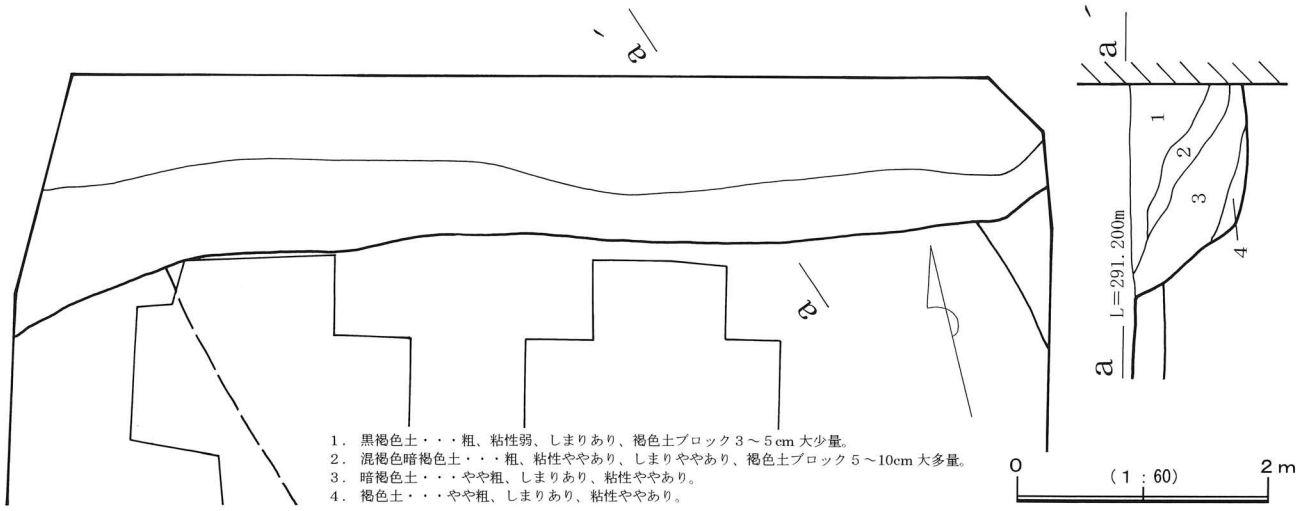
本住居跡から出土した遺物は、完形品などの良好なものはなくすべて破片であった（第６図）。

２．溝状遺構（第７～９図、第２・３表、図版２－５・６、４－１・２）

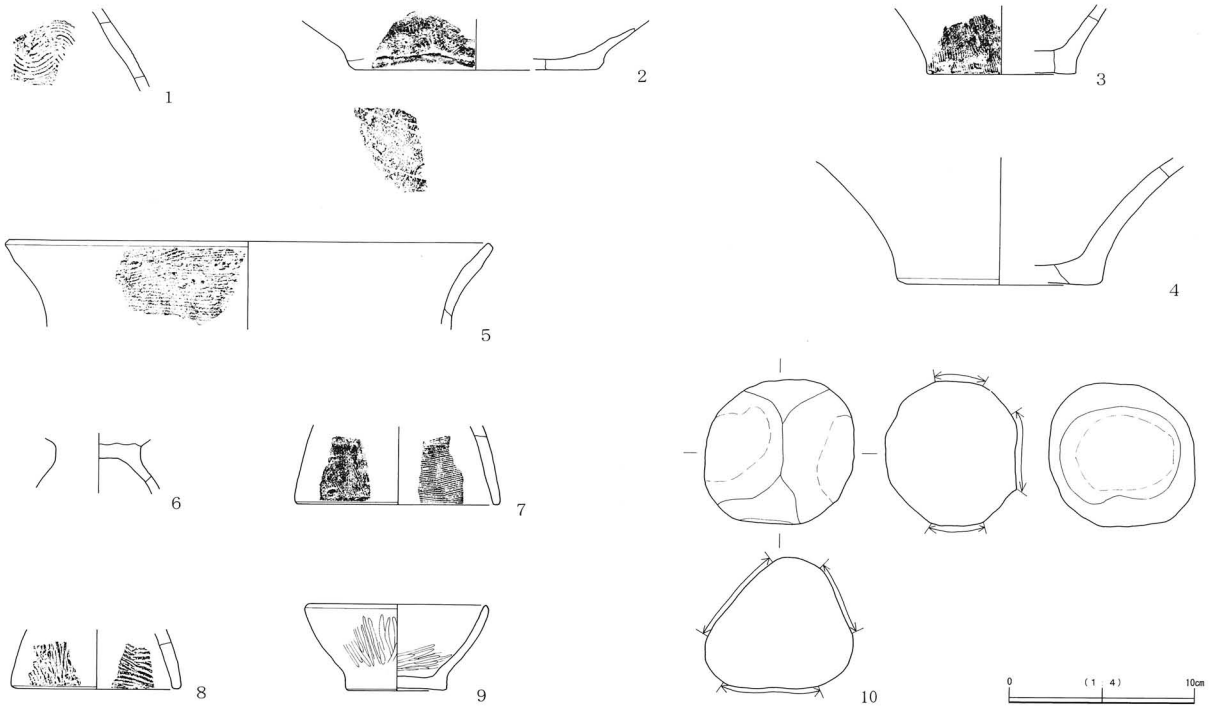
ａ．１号溝状遺構（第７・８図、第２表、図版２－５、４－１）

調査区の北側に位置し、遺構の北側は調査区外となるが、今回確認できた規模は長さ約8.0ｍ、幅約1.3ｍ、深さ約90㎝である。１号住居跡の床面上から検出された焼土跡が本遺構の中まで分布していないことから、本遺構が１号住居跡を大きく削平していることは明らかである。

出土遺物は、細片が中心で量も少なく、中には１号住居跡のものも混在している可能性がある。



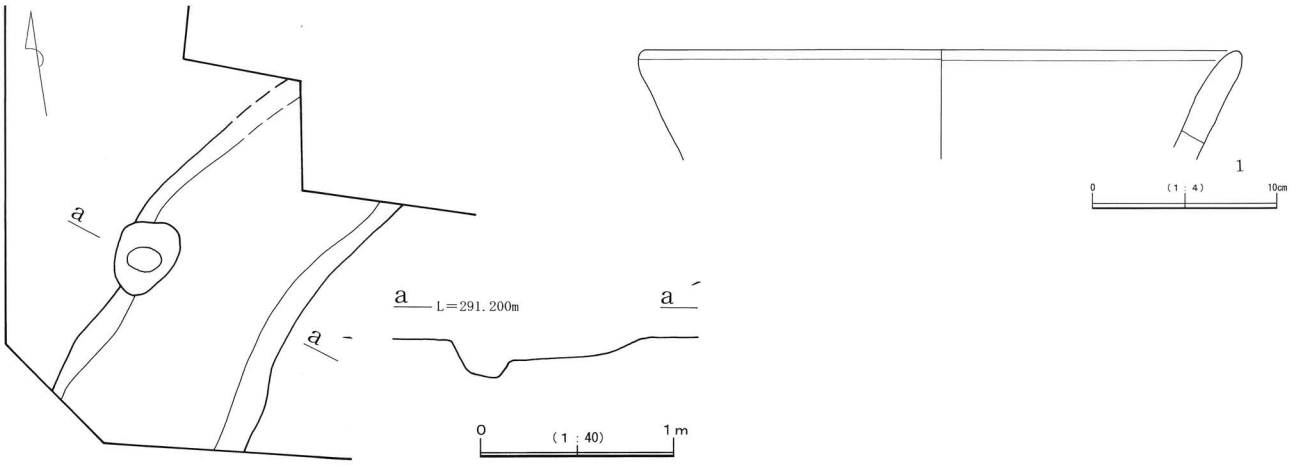
第７図　１号溝状遺構



第８図　１号溝状遺構出土遺物

b．２号溝状遺構（第９図、第３表、図版２－６、４－２）

調査区の南西部に位置する。確認できた大きさは、長さ約2.0m、幅約1.0m、深さ約10cmである。出土遺物はほとんどなく、唯一、第９図－１が出土したのみであった。

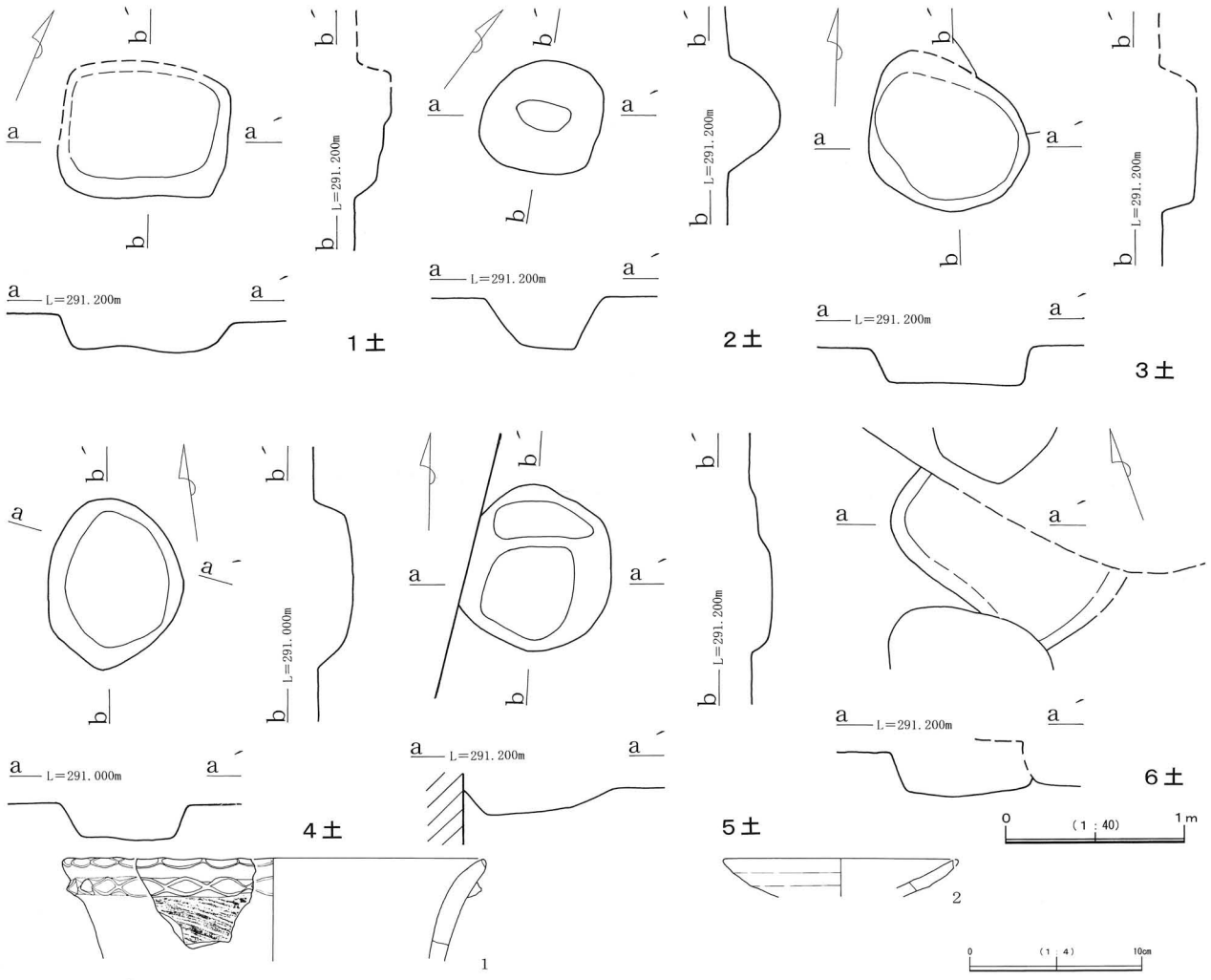


第９図　２号溝状遺構と出土遺物

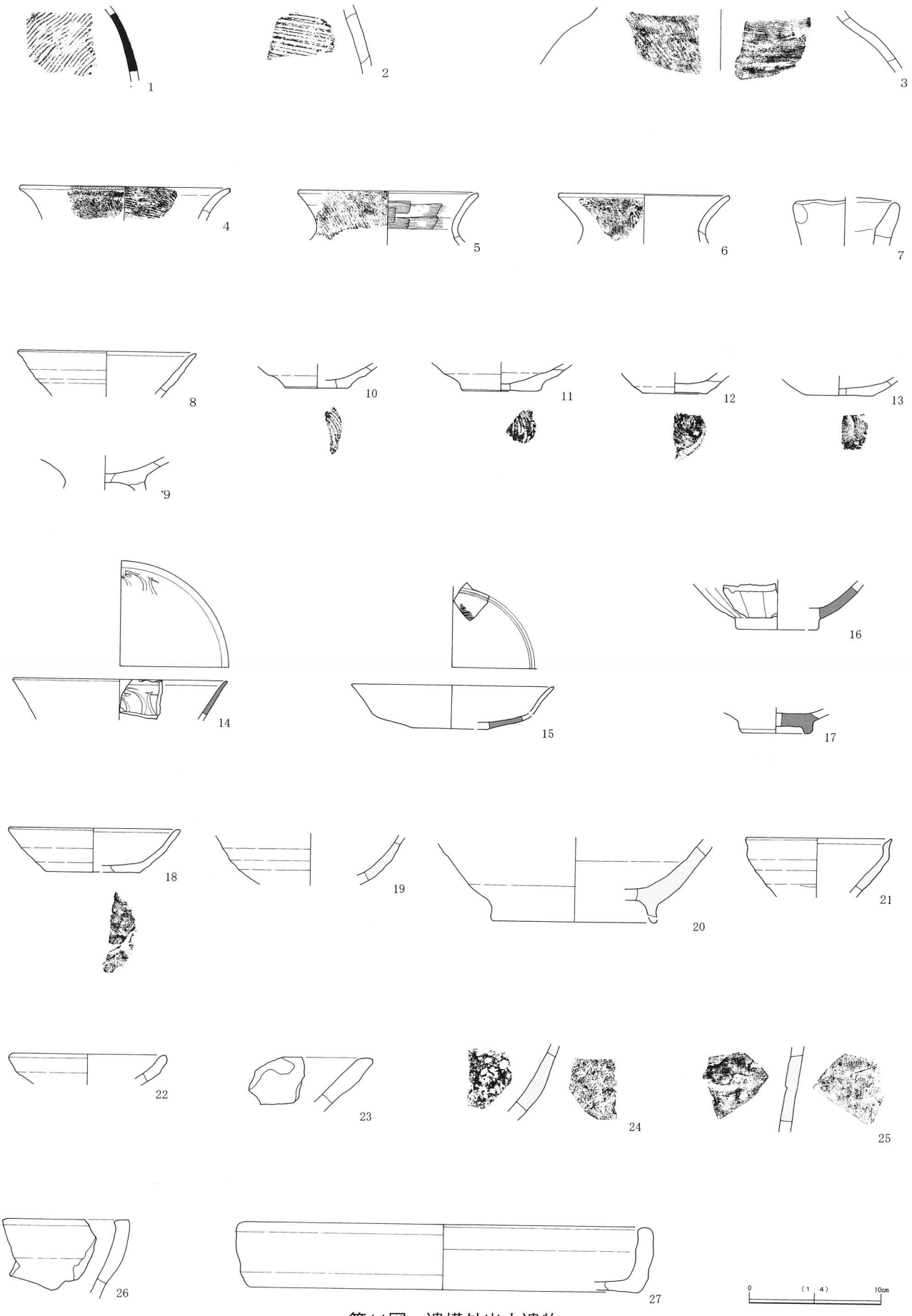
３．土坑（第10図、第４・５表、図版２－７・８、３－１～４、４－２）

計６基が発見された。方形のもの（１・６号土坑）、円・楕円形（２～５号土坑）のものがある。

遺物は３号土坑から弥生中期の条痕文の土器片、４号土坑で平安時代末葉の土器が出土した。



第10図　土坑と出土遺物



第11図　遺構外出土遺物

No	器種	器形	出土地点	大きさ			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
				器高	口径	底径					
第6図1	弥生土器	甕	1号住				やや粗、長石、石英、白色粒子	橙褐色	良	口唇部に刻み。	3－5
第6図2	弥生土器	台付き甕	1号住			(6.7)	やや粗、石英、金色雲母、白色粒子	橙褐色	良	ハケ調整。	3－5
第6図3	弥生土器	台付き甕	1号住			(6.8)	やや密、白色粒子	橙褐色	良	ハケ調整。	3－5
第6図4	弥生土器	台付き甕	1号住			(6.8)	やや粗、石英、白色粒子	赤茶褐色	良		3－5
第6図5	弥生土器	壺	1号住				粗、石英、黒色雲母、白色粒子	黄褐色	良	条痕文。	3－5
第6図6	弥生土器	壺	1号住				粗、石英、黒色雲母、白色粒子	黄褐色	良	条痕文。	3－5
第6図7	弥生土器	壺	1号住				粗、石英、黒色雲母、白色粒子	橙褐色	良	条痕文。	3－5
第6図8	弥生土器	壺	1号住				粗、石英、金色雲母	黒褐色	良	ハケ調整、2個一対のボタン状文。	3－5
第6図9	弥生土器	壺	1号住			(10.4)	粗、石英、白色粒子	橙褐色	良		3－5
第6図10	弥生土器	壺	1号住			(10.0)	粗、長石、石英、金色雲母、白色粒子	茶褐色	良		3－5
第6図11	弥生土器	壺	1号住			5.3	粗、石英、白色粒子	赤茶褐色	良	外面ハケ調整。	3－5
第6図12	弥生土器	高坏	1号住		(21.0)		粗、長石、石英、金色雲母、白色粒子	暗赤褐色	良	外面ハケ調整、内面丁寧な磨き。	3－5
第6図13	弥生土器	高坏	1号住		(18.0)		粗、石英、黒色雲母、白色粒子	赤茶褐色	良	内面全体に赤彩。	3－5
第6図14	弥生土器	高坏	1号住				粗、長石、石英、白色粒子	赤茶褐色	良	内・外面全体に赤彩。	3－5

第1表　1号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	出土地点	大きさ			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
				器高	口径	底径					
第8図1	弥生土器	甕	1号溝				粗、石英、赤色粒子	黄橙褐色	良	櫛描波状文。	4－1
第8図2	弥生土器	壺	1号溝			(13.0)	粗、石英、赤色粒子	黄褐色	良		4－1
第8図3	弥生土器	壺	1号溝			(8.0)	粗、石英、白色粒子、赤色粒子	橙褐色	良	ハケ調整。	4－1
第8図4	弥生土器	壺	1号溝			(11.0)	粗、石英、白色粒子、金色雲母	黄褐色	良		4－1
第8図5	弥生土器	甕	1号溝		(15.5)		粗、石英、白色粒子、金色雲母	暗黄褐色	良	ハケ調整。	4－1
第8図6	弥生土器	台付き甕	1号溝				粗、石英、白色粒子	赤褐色	良		4－1
第8図7	弥生土器	台付き甕	1号溝			(10.8)	密、白色粒子	茶褐色	良	ハケ調整。	4－1
第8図8	弥生土器	台付き甕	1号溝			(8.4)	粗、石英、白色粒子	暗茶褐色	良	ハケ調整。	4－1
第8図9	弥生土器	小形鉢	1号溝	4.6	(9.4)	5.2	やや密、石英、金色雲母、白色粒子	黄褐色	良	内・外面全体に磨きと赤彩。	4－1

No	器種	大きさ(cm)			石材	調整・特徴	図版
		最大長	最大幅	最大厚			
第8図10	磨り石	7.7	7.8	7.1	花崗岩	磨面が顕著に残る。	4－1

第2表　1号溝状遺構出土遺物観察表

No	器種	器形	出土地点	大きさ			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
				器高	口径	底径					
第9図1	土器	鉢	2号溝		(31.2)		粗、石英、白色粒子、赤色粒子	赤茶褐色	良	無文。	4－2

第3表　2号溝状遺構出土遺物観察表

No	大きさ(cm)			特徴	図版
	長軸	短軸	深さ		
1号土坑	95	75	20		2－7
2号土坑	75	65	28		2－8
3号土坑	90	80	23	弥生中期の条痕文土器。	3－1

No	大きさ(cm)			特徴	図版
	長軸	短軸	深さ		
4号土坑	100	77	20	平安時代末葉の土師質土器。	3－2
5号土坑	95	(85)	15		3－3
6号土坑	130	(55)	25		3－4

第4表　土坑一覧

No	器種	器形	出土地点	大きさ			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
				器高	口径	底径					
第10図1	弥生土器	壺	3号土坑		(24.0)		粗、石英、白色粒子	暗褐色	良	口縁部に一条の突帯、外面に条痕文。	4－2
第10図2	土師質土器	小皿又は坏	4号土坑		(13.2)		やや粗、金・黒色雲母	赤茶褐色	良	ロクロ整形。	4－2

第5表　土坑出土遺物観察表

No	器種	器形	出土地点	大きさ			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	図版
				器高	口径	底径					
第11図1	須恵器	甕	表土				密、白色粒子	灰褐色	良	叩き痕。	
第11図2	弥生土器	壺	5層				粗、石英、黒色粒子	黄褐色	良	条痕文。	4－3
第11図3	弥生土器	壺	5層				密、石英、金色雲母、白色粒子	橙褐色	良	ハケ調整。	4－3
第11図4	弥生土器	壺	カクラン		(15.8)		粗、石英、金色雲母、白色粒子	暗灰褐色	良	口唇部に刻み、ハケ調整。	4－3
第11図5	弥生土器	壺	5層		(13.6)		粗、石英、白色粒子	暗赤褐色	良	内外面ハケ調整、口唇部ナデ。	4－3
第11図6	弥生土器	壺	5層		(13.0)		粗、石英、白色粒子	暗赤褐色	良	内外面ハケ調整、口唇部ナデ。	4－3
第11図7	手捏ね土器		4層		(7.2)		密、石英、黒色雲母、白色粒子	橙褐色	良		4－3
第11図8	土師質土器	坏	5層		(11.2)		粗、金色雲母、白色粒子	暗茶褐色	良	ロクロ整形。	4－4
第11図9	土師質土器	脚高高台坏	4層				粗、金色雲母、白色粒子	暗茶褐色	良	ロクロ整形。	4－4
第11図10	土師質土器	小皿	4層			(5.0)	粗、石英、金色雲母	暗茶褐色	良	ロクロ整形。	4－4
第11図11	土師質土器	小皿	5層			(6.0)	粗、金色雲母	暗茶褐色	良	ロクロ整形、底部糸切痕。	4－4
第11図12	土師質土器	小皿	4層			(4.8)	粗、金色雲母、白色粒子	暗茶褐色	良	ロクロ整形、底部糸切痕。	4－4
第11図13	土師質土器	小皿	5層			(5.0)	粗、金色雲母、白色粒子	暗茶褐色	良	ロクロ整形、底部糸切痕。	4－4
第11図14	青磁	碗	5層				やや粗		良	龍泉窯、12世紀中葉～後半。劃花文。	4－4
第11図15	青磁	皿	表土				密		良	龍泉窯、12世紀中葉～後半。櫛描文。	4－4
第11図16	青磁	碗	4層直下				密		良	龍泉窯、13世紀初頭～前半。鎬蓮弁文？	4－4
第11図17	青磁	碗	4層直下			(5.2)	密、白色粒子		良	龍泉窯、13世紀初頭～前半。	4－4
第11図18	土師質土器	カワラケ	5層	3.4	(12.6)	(7.2)	粗、白色粒子、赤色粒子	黄褐色	良	ロクロ整形、15世紀代？	4－5
第11図19	灰釉陶器	碗	5層				粗		良	瀬戸・美濃製品。	4－5
第11図20	陶器		5層				粗、白色粒子	灰褐色	良	胎土非常に粗い。	4－5
第11図21	陶器	天目茶碗	表土		(10.6)		粗		良	瀬戸・美濃製品、16世紀後半。	4－5
第11図22	土師質土器	カワラケ	表土		(11.4)		やや粗、金色雲母、白・赤色粒子	橙褐色	良	ロクロ整形、16世紀代？	4－5
第11図23	土師質土器	擂鉢？	5層				粗、白色粒子、赤色粒子	橙褐色	良	在地産か？	4－5
第11図24	陶器	常滑甕	5層				粗、白色粒子		良		4－5
第11図25	陶器	常滑甕	5層				粗、白色粒子		良		4－5
第11図26	瓦質土器		表土・5層				粗、白色粒子	黒灰褐色	良		4－5
第11図27	土器	内耳鍋	表土	5.3	(30.8)	(29.8)	粗、金色雲母、白色粒子	黒褐色	良	耳部の破片あり。	4－5

第6表　遺構外出土遺物観察表

ま と め

以上みてきたように、今回の調査では、住居跡１軒のほか、溝状遺構２条、土坑６基、ピット３ヶ所が発見された。

弥生時代の遺構について：該期の遺構には、1号住居跡、1号溝状遺構、３号土坑がある。

この内、３号土坑からは外面に条痕文が施され一条の突帯を巡らせた壺の破片（第10図－１）があり、今回発見された遺構の中では最も古い弥生時代中期に該当するものと考えられる。

１号住居跡は、破片の遺物が中心であったが、出土した壺、甕、赤彩された高坏などの内容から、弥生時代末葉の時期に相当するものとみられる。本住居跡は、床面上に帯状の焼土が検出され、焼失家屋であったことが明らかとなった。

１号溝状遺構は１号住居跡を削平していたが、両遺構の遺物からは時期差はほとんどみられないため、住居構築後間もなく１号溝状遺構がつくられたようである。遺構の性格は不明である。

これまでに、松ノ尾遺跡では第Ｘ次調査までが行われてきている（平成16年３月現在）。

この内、第Ⅱ次調査で方形を呈する住居跡１軒が発見されており、遺物から弥生時代末葉と考えられる。又、昨年調査した第Ⅸ次調査（平成15年度）では長軸約12ｍ、短軸約９ｍを測る大型で小判型を呈する弥生時代後期の住居跡などが発見されてきている。

このように、松ノ尾遺跡内においても該期の遺構が広い範囲で点在していることが窺える。

遺構外出土遺物について：調査をおこなった第Ⅷ地点では、基本土層として５層に分けることが可能であった。第１層灰褐色土（厚さ約10㎝）、第２層灰白色粘土（厚さ約10㎝）、第３層灰赤褐色土（厚さ約10㎝）、第４層赤褐色土（厚さ約10㎝）、第５層暗褐色土（厚さ約20㎝）と分層が可能で、地山面は地表面から深さ約60㎝あり、各遺構の確認面となっている。

今回、遺構外から出土したものには弥生時代から陶磁器類を含む近・現代の遺物までがみられた。この内、第１～３層まではおよそ耕作土として捉えられるようであり、上記の時代の遺物が混ざって出土している。

一方、第４・５層では弥生時代の遺物と伴に平安時代後半から中世初頭の遺物と中世後半（15～16世紀代）があり、比較的まとまって出土する傾向が窺えた。

平安時代後半から中世の遺物：平安時代の甲斐型坏の破片が少量出土しているが、金色雲母を含んだ土師質土器（小皿、坏、脚高高台坏など）が主に出土している。この他、中国産の貿易陶磁器である青磁が４個体（龍泉窯劃花文碗１点、同安窯櫛描文皿１点、龍泉窯碗２点）出土している。

今回、４号土坑が土師質土器片を伴うだけで他に主だった該期の遺構は存在しないが、近年本遺跡ではこのような貿易陶磁器の出土が目立ち、遺跡の性格を今後検討していく上で注視していきたい。

中世後半（15～16世紀代）：主な遺構は今回確認できなかった。カワラケ片、擂鉢片、瀬戸・美濃製品、常滑片などが表土から第５層までの間で出ているが、ほとんどが細片のものであった。

しかし、この周辺域で該期の遺構が存在している可能性を示唆する資料と考えられる。

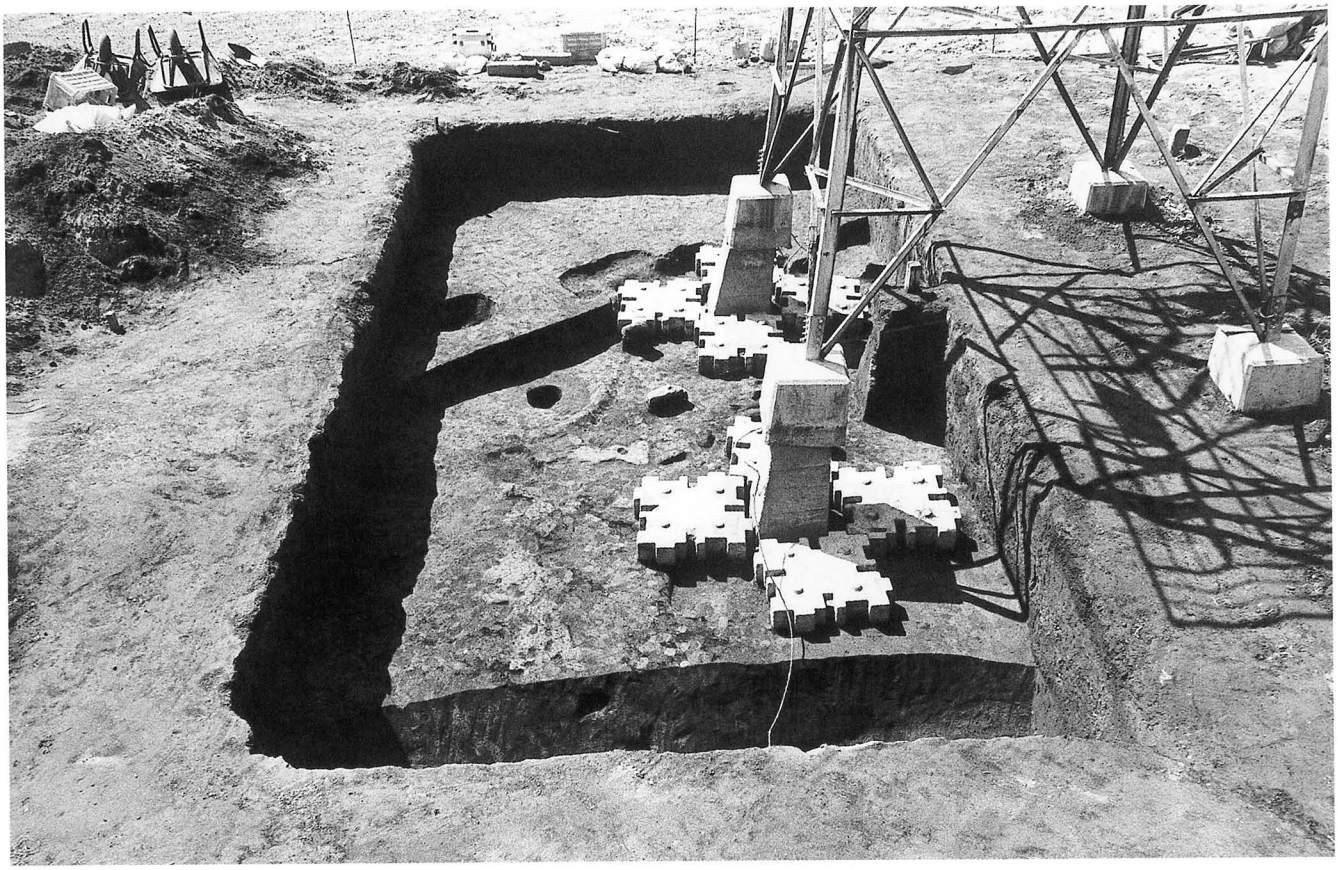
今回の第Ⅷ次調査では、弥生時代の遺構が発見され松ノ尾遺跡における該期の様相について新たな成果が追加された。また、他の時代は遺物のみの確認に留まったことから、とくに本遺跡内の西側では弥生時代以外の時代では、かなり希薄なものとなることが明らかとなった。

引用・参考文献

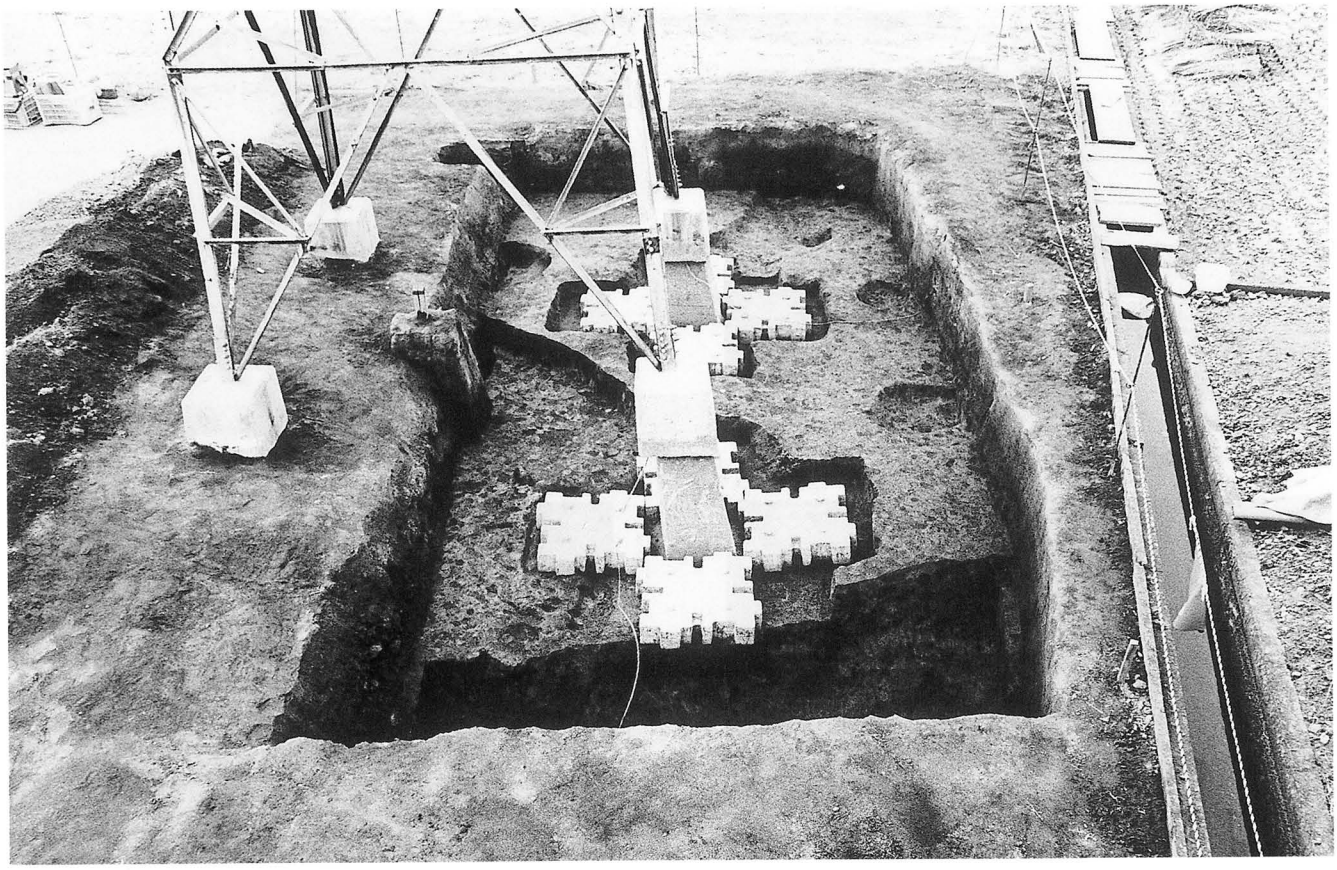
大嶌正之　1996　「松ノ尾遺跡」　敷島町教育委員会

大嶌正之　2001　「埋蔵文化財試掘調査年報'01」　敷島町教育委員会

写真図版

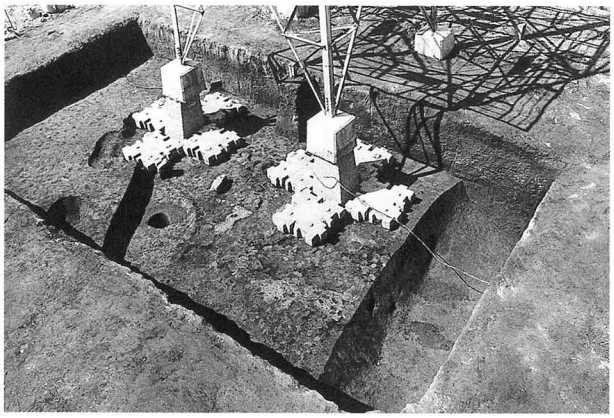


1　調査区東側全景

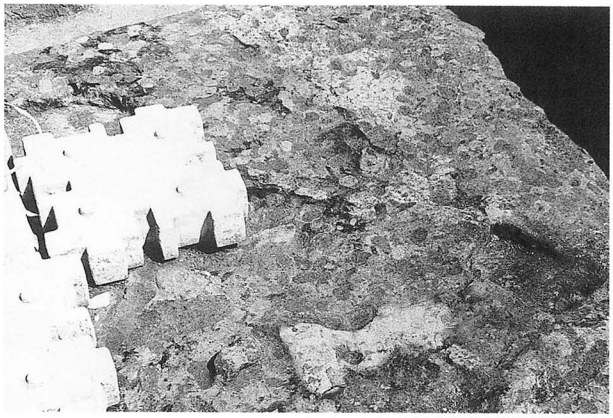


2　調査区西側全景

図版 2

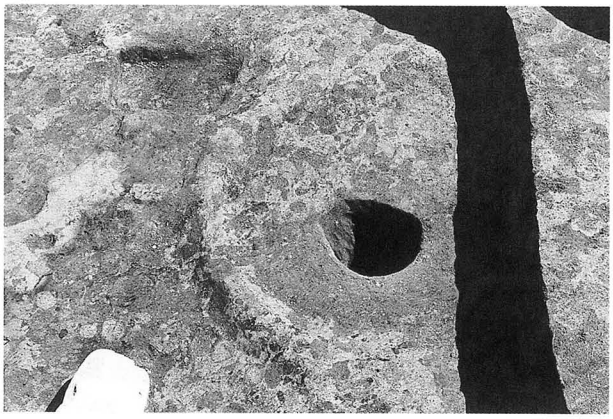


1　1 号住居跡

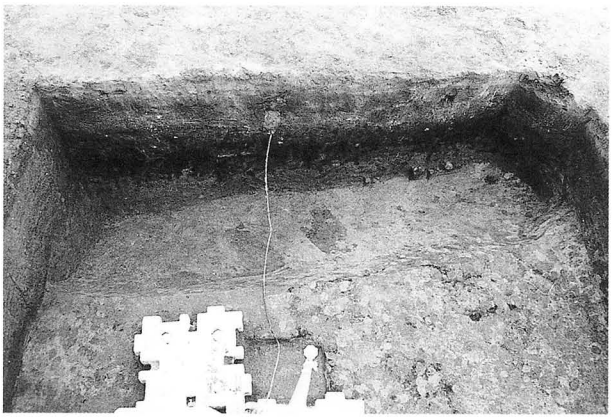


2　1 号住居跡焼土出土状態

3　1 号住居跡南側出入り口施設（南から）



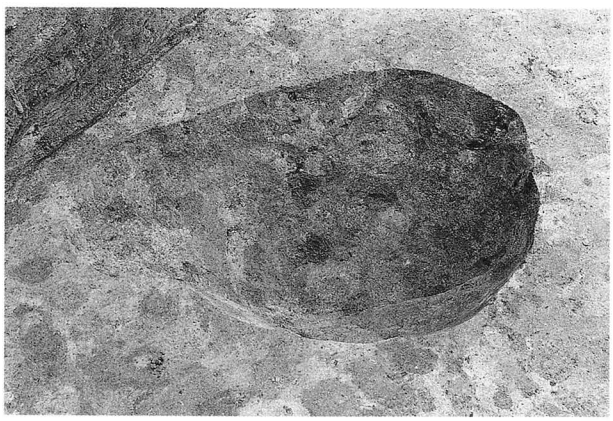
4　1 号住居跡南側出入り口施設（西から）



5　1 号溝状遺構

6　2 号溝状遺構

7　1 号土坑

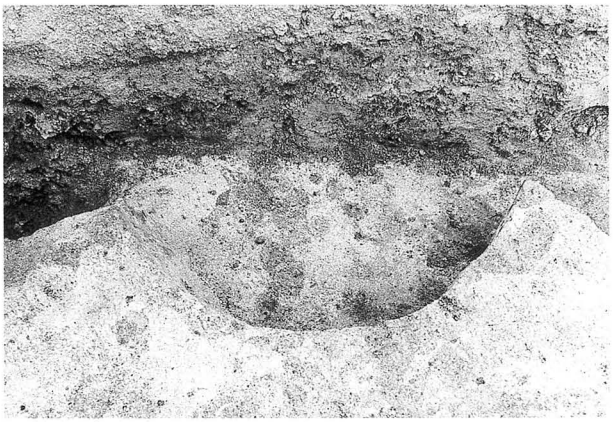


8　2 号土坑

1　3 号土坑

2　4 号土坑

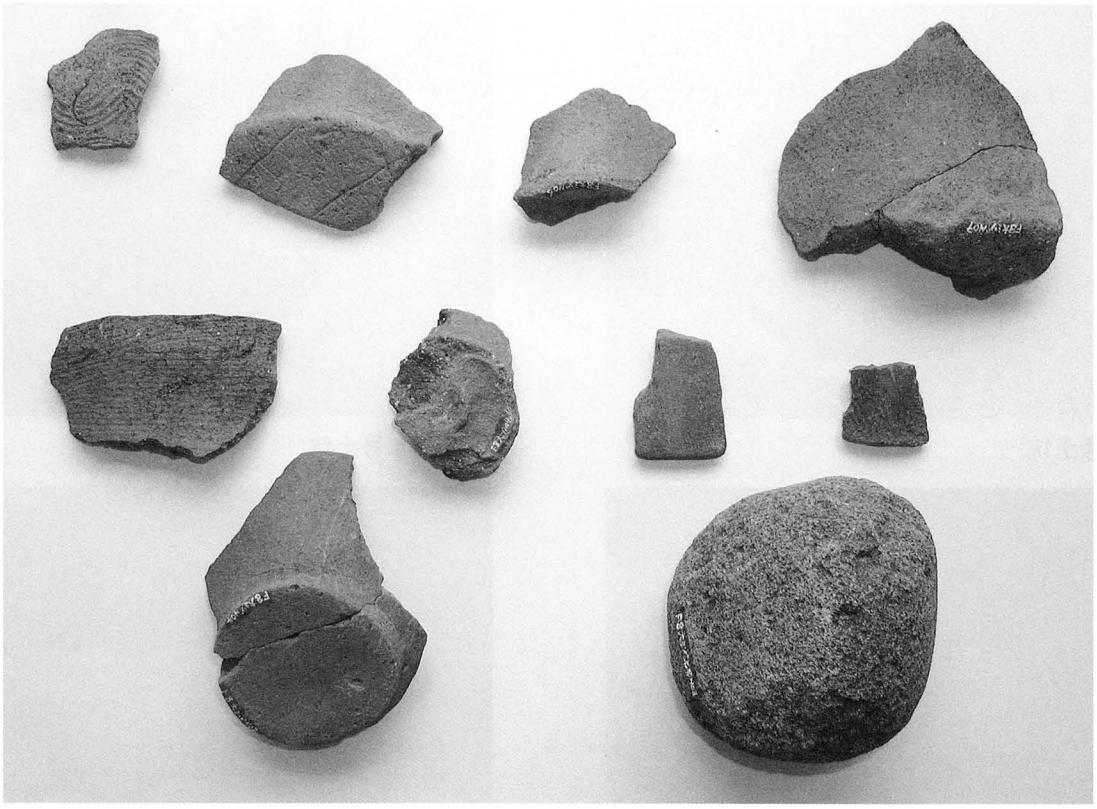
3　5 号土坑



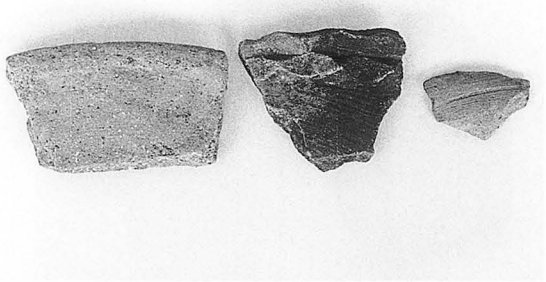
4　6 号土坑

5　1 号住居跡出土遺物

図版 4



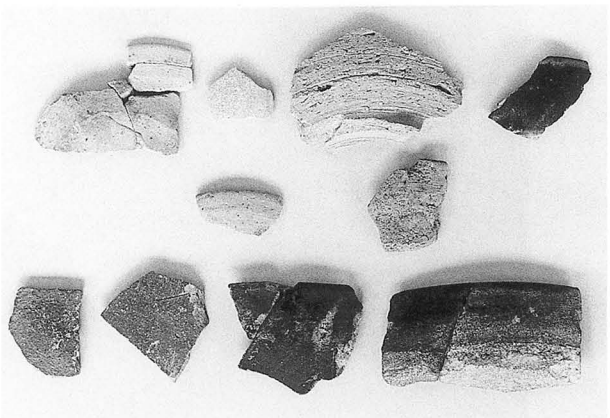
1　1号溝状遺構出土遺物



2　2号溝状遺構と土坑出土遺物

3　遺構外出土遺物（1）

4　遺構外出土遺物（2）



5　遺構外出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき
書名	松ノ尾遺跡 Ⅷ次
副書名	
巻次	
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書
シリーズ番号	16
編著者名	小坂隆司
編集機関	敷島町教育委員会
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
発行年月日	平成16年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まつのおいせき 松ノ尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町中下条1435－1外	193928	18			平成14年 8月29日 ～ 平成14年 9月30日	67	鉄塔 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ノ尾遺跡	集落跡	弥生時代	住居跡 溝状遺構 土坑 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	弥生時代末葉の焼失住居跡。

敷島町文化財調査報告　第16集

松ノ尾遺跡 Ⅷ

発行日　2004年（H16）3月31日
発行　敷島町教育委員会
山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
TEL（055）277－4111
印刷　株式会社　少国民社

敷島町文化財調査報告書　第16集（山梨県）

松ノ尾遺跡 VIII

敷島町教育委員会・敷島町文化財調査会・東京電力株式会社